

ヒューマノミクスー人間性経済学の探究(発表要旨)

岡部光明

2022年6月

【概要】

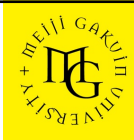
本稿は、近刊書籍『ヒューマノミクスー人間性経済学の探究』（岡部光明著、2022年5月刊行）における中核的な議論を「ビジョン研究会」*において発表した際に使用したパワーポイント画面を拡充して一つの研究資料としたものである。こうした画面による方が、文章化するよりも要点を簡潔に整理でき、また理解もし易いのでこの形式による研究資料として取りまとめた。

要旨は次の通り。すなわち (1) 現在の主流派経済学は、人間を単純に捉えること（利己的・個人的存在）により理論と政策につき堅固な体系を構築している（経済学は「社会科学の女王」）、(2) しかし人間の本質としては、利己性のほか、つながり感覚、利他性、潜在的な能力といった重要かつ多様な要素がある、(3) これは経済学の始祖アダム・スミスの人間観であり、また現代諸科学の研究結果でもあるので、経済学は今後これらを取り込んだ学問にしてゆく必要がある、(4) 具体的には、人間社会は従来の「二部門（市場・政府）モデル」に代えて「三部門（市場・政府・コミュニティ）モデル」に即して理解することが望ましい、(5) 三部門モデルを基準にすれば、従来の社会的目標（効率性と公平性）だけでなく準公共財・準公共サービスを適切に充足させうるほか、人間の幸福（well-being）をより高いものにしうる（これは経済政策の理論に基づき説明可能）、(6) 人間一人一人がその潜在能力を引き出せば、個人の幸せ（ウェル・ビーイング）が高まるだけでなくより良い社会を実現できるとする一つの自己啓発の道（実践哲学）があり、今後の展開が注目される。

キーワード: アダム・スミス、人間性、潜在能力、幸福、三部門モデル、実践哲学

* 2022年6月22日に日本プレスセンタービル（東京都千代田区内幸町）において開催。研究会の座長は久水宏之氏。この発表機会を与えてくださった同氏に感謝申し上げたい。

ビジョン研究会



ヒューマノミクス

—人間性経済学の探究—

岡部光明
慶應義塾大学 (名誉教授)

2022年6月22日

1

経済学は **社会科学の女王**。しかし・・・



人間性
(つながり・利他性なども)



経済学
(人間は利己的存在)

2






人間性経済学！

3

目次

1. 主流派経済学には強さと弱さ
2. 経済学は「幅広い人間観」に立脚する必要性
3. 人間社会の的確な理解: 「三部門モデル」
4. 個人の幸せとより良い社会: 実践哲学
5. 結論

4

1. 主流派経済学には強さと弱さ

■現代経済学の大分類

{	<ul style="list-style-type: none"> ・ホモ・エコノミクス*1を前提とする経済学 	<ul style="list-style-type: none"> ・主流派経済学 (mainstream economics)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ホモ・エコノミクスを前提としない経済学 	<ul style="list-style-type: none"> ・行動経済学*2 (behavioral economics) ・その他の経済学 (social economics など*3)

*1 人間は「消費増大による効用最大化を目的として利己的かつ合理的に行動する存在である」という人間像。経済人間 (homo economics)。

5

■全ての現象は、個人の消費行動から説明する (それが可能) →「方法論的個人主義」

■効用(満足度:それは消費量によって決定)を最大化。

$$U_s = \int_s^{\infty} u(c_t) \exp[-\theta(t - s)] dt \quad (1)$$

■但し一定の制約条件(下記)の下でそれを行う。

$$c_t + \frac{da_t}{dt} + na_t = w_t + r_t a_t \quad (2)$$

6

個人の最適化行動（前図の意味）

最大化目標： 満足度 = 今年の満足度 + 来年の満足度 + 再来年の満足度 + ...

予算制約： 消費額と純資産増加の合計は、賃金収入と財産収入の合計額を越えることはできない。

これは、多くの自然科学と同様の発想。つまり・・・

7

■現代科学における要素還元主義 (reductionism)

・物理学： 物質 → 原子 → 原子核 → 素粒子 ...

・生命： 臓器 → 細胞 → 遺伝子 ...

・経済学： マクロ現象(物価、失業率等) →
ミクロ主体(個人)の動機・行動に還元して説明：「**方法論的個人主義**」

→ これこそが「科学的」
→ 「ミクロ的基礎がある」を金科玉条

8

■しかし人間を余りに単純化。考うべき点：

- ・消費・利己性以外の動機（利他性、社会規範、等）。
- ・人間相互のつながり（絆、ネットワーク）。
- ・顕現化していない潜在能力。

■ 本稿では、とくに次の二つの視点に基づく**人間性**を取り上げ、それを現代経済学に導入する：

その1： 経済学の始祖アダム・スミスの間観

その2： 現代科学が解明した人間の多様な行動動機

9

2. 経済学は「幅広い人間観」に立脚する必要性

主流派経済学の前提	本来的な人間観	再検討事項（例）
1. 唯物主義 人が関心をもつのは財やサービスだけ。	・モノだけでなく幅広く 幸福 (happiness; well-being; eudaimonia) を追求。	・ 幸福 とは何か。 ・ 仕事 の意義（単なる非効用か、使命発動に伴う生きがい・喜びは）。
2. 利己主義 関心事は消費に伴う自分の満足度（効用）だけ。	・生命維持のため利己的動機を持つが 利他的動機 (altruism)も併わせ持つ。	・利他的行動も実は利己的動機に起因するという経済学の捉え方には問題。
3. 個人主義 個人は他人から影響を受けず、他人に影響を与えることもない(原子論的人間観)。	・人間は相互に関心を持ち、影響を与えあう 社会的存在 (social network; community; virtue ethics)。	・人間の つながり （社会的ネットワーク）、 コミュニティ 、 徳倫理 など個人を超えた視点も不可欠。

注：「カネだけ、今だけ、自分だけ」。

10

10

その1： A. スミスの(幅広い)人間観を継承する必要

a. 『国富論』（1776年）にみられる人間観(の一側面)
利己心

b. 『道徳感情の理論』（1759年）における人間観
きづな感覚、利他心

c. 『国富論』にみられる人間の潜在能力
潜在能力

11

a： 『国富論』にみられる人間像(の一側面)

「われわれが夕食にありつけるのは、肉屋、酒屋、パン屋の**慈悲心**のおかげではなく、**彼ら自身の利益**に照らしてそうだからである。われわれは、彼らの人間性に対してではなく**彼らの自愛心**に訴えかけるわけであり、また、われわれが何を必要としているのかを彼らに伝えるのではなく、**彼らの利益**を話題にするのである。」（第1編第2章）

→ **人間の利己心、それには社会的な機能。**

12

b: 『道徳感情の理論』にみられる人間像

「人間がどれほど利己的な存在であると想定するにしても、人間の本性については明らかに幾つかの原則がある。それは、人間は他人の運命に心を寄せ、他人の幸福が自分にとって必要なものだと感じるという原則である。他人を憐れむ心や、思いやる心もこの種の感情である。」(第1章冒頭の文章)

→ 人間には絆感覚・利他心がある。

13

C: 『国富論』にみられる人間像(の一側面)

「個人ごとの天分の違いは、実際には考えられているよりはるかに小さい。(中略) 例えば、仕事の性格に雲泥の差があるようにみえる学者と荷担ぎ労働者の差は、生まれつきの天分に起因するというよりも習慣や教育の違いによるものだと思える。」

(『国富論』第1編第2章)。

→ 人間は、だれでも潜在能力を秘めている。

14

その2: 現代科学の成果を活用する必要(2点)

■研究成果1: 人間はつながって生きる存在

- ・主流派経済学では、原子論的人間観に立ち、瞬時に最適化行動を繰り返す存在として人間を理解。機械的人間。
- ・しかし、人間の本質は「社会性」。つながって生きる存在 => 家族、仕事の同僚、友人、ネット仲間、学会員。

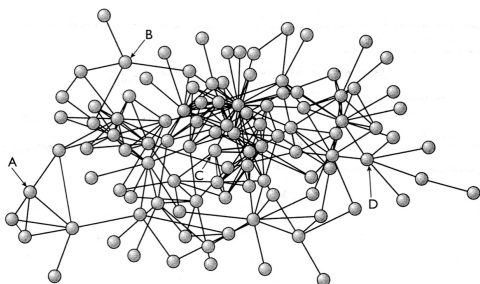
15

■人間は、他者の中に「嵌めこまれた」存在。

- ・他者から影響を受ける。一方、他者に影響を与う。
- ・つながることによって、各自の限界を超越した結果を生み出しうる。

16

■社会的ネットワークの例: 学生寮における友人関係



- ・二つの構成要素: ノード(結節点)、リンク(つながり)。

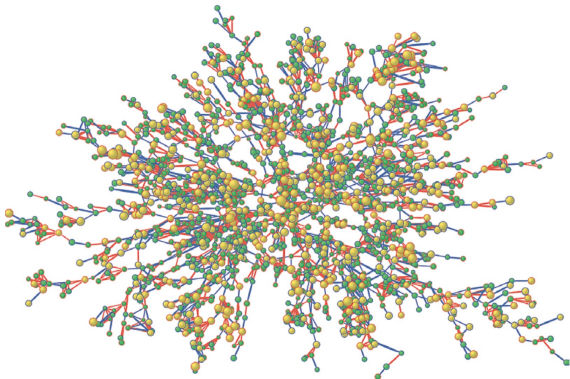
17

■Christakis and Fowler (2007)の興味深い研究

- ・フレイミングム心臓研究データ。
12,067人の社会的ネットワーク。1971~2003年。
- ・結論:「あなたの友人の友人は、あなたを肥満体にする」
 - 社会的なつながり(ネットワーク)があればそれを介して肥満は“伝染”(伝播)する。
 - 単に体型の似たもの同士がつながりを形成しているのではなく、社会的ネットワークを介して肥満が伝播。「類は友を呼ぶ」現象(同類性:homophily)ではない。
- ・肥満体の友人がいる → 肥満になる可能性は57%上昇。

18

■ 肥満の“伝染” (2000年時点)



注: ノード(小円)の大きさは肥満度に比例。

19

■ 考察: 「肥満が伝染する」メカニズム:

■ バイ菌(ビールス)の拡散によるのではない!

1. 行動の模倣。 肥満コミュニティに属するメンバーは、お互いに行動を模倣しやすい。 → 肥満が広がる。
 2. 規範(norm)の伝播。 文化ないし慣習の共有。 肥満にマイナスのイメージがない。 → 肥満が広がる。
- * この研究の後、3組の独立した研究グループが、別の対象者に対して行った研究によっても、肥満の伝染性が結論付けられている(社会的つながりの重要性)。

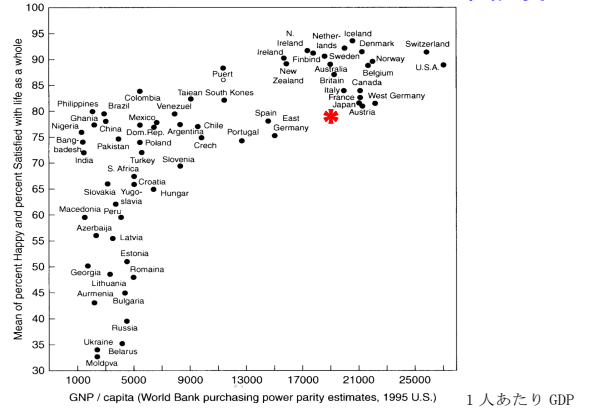
20

■ 研究成果2: 所得が一定水準以上になれば、人間は消費増大よりも別な側面を追求する。

一では、何を追求?

21

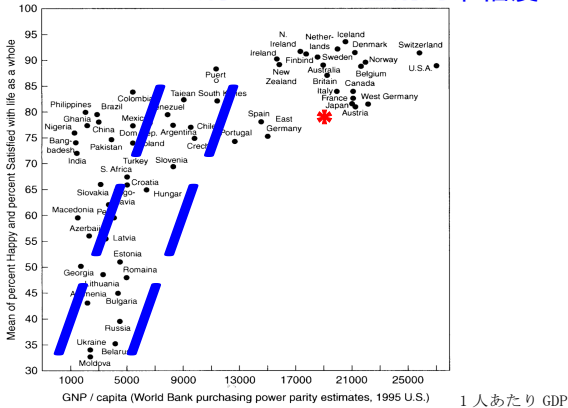
幸福ないし満足という回答の百分比 一人あたりGDPと主観的幸福度



(出所) Diener, Kahneman, and Helliwell (2010: 図表 8.1)。

22

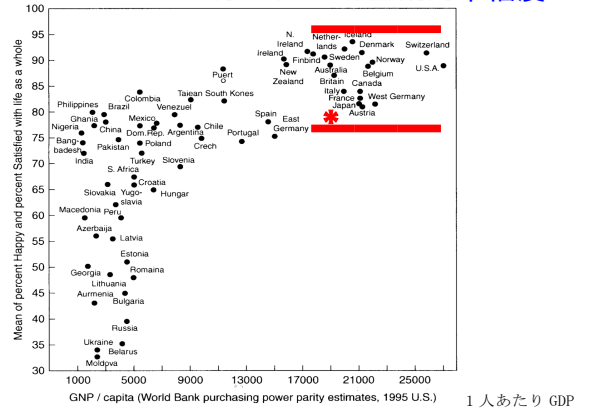
幸福ないし満足という回答の百分比 一人あたりGDPと主観的幸福度



(出所) Diener, Kahneman, and Helliwell (2010: 図表 8.1)。

23

幸福ないし満足という回答の百分比 一人あたりGDPと主観的幸福度



(出所) Diener, Kahneman, and Helliwell (2010: 図表 8.1)。

24

■個人が追求する「幸福」には三種類:

1. 快適な生活 (pleasant life)
 - ・所得水準
2. 良い生活 (good life)
 - ・健康・安全・環境の質
3. 意義深い人生 (meaningful life; eudaimonia)
 - ・自立性・つながり・人生の目的意識・潜在能力の顕現化

(注) Seligman (2001), Frey (2008), OECD (2103)。

25

■所得が一定の水準以上になる場合、人間のニーズを物的側面(「市場」と「政府」、あるいは効率性と公平性)だけで捉えるのは単純に過ぎる。

→ 人間的要素を取り込むには、人間性に関連する集団「コミュニティ」を導入するのが一つの自然な方向。

■コミュニティは、人間性ない「幸福に関する諸要因」(自立性、自信、自己実現、人間の絆、人生の目的)とも密接に関連。人間は自分の消費量増大だけが関心事項ではない。(A. スミスの人間観を想起)

26

■なお、コミュニティには、三つの類似概念(用語)がある。

(1) コミュニティ (Community)

- ・従来の「民」とも「官」とも異なる「公」。
- ・社会的ネットワークの形成による人的結合。

(2) 第三部門 (Third sector)

- ・主として欧州での呼称。
- ・中間的・折衷的な部門。
- ・社会学、政治学の視点。

(3) 非営利部門 (Non-profit sector)

- ・主としてアメリカでの呼称。
- ・市場、政府とは異なる独立部門。
- ・経済学の視点。

27

■主流派経済学はこの現象を説明できるか?



- ・一つのコミュニティだが、説明不可。
- ・ボランティア活動やNPOは「異物」として対象から排除。

28

■残念ながら、こうした人間行動が現実中存在することは主流派経済学では排除されている。

ー日本経済学会におけるパネル討論:

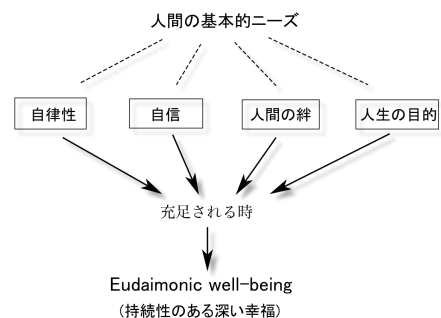
「コミュニティというものは経済学にとっては異物であり対立概念である(中略)ので十分注意しなければならない」(東京大学・岩本康志氏)

ー照山ほか(2016、238ページ)

→ 報告者(岡部)は、その発想の妥当性に疑問を抱く。

29

人間の基本的ニーズと幸福の実現



■コミュニティ(非営利三部門、第三部門)の重要性。

(出典) 岡部(2017)図表7-5。

30

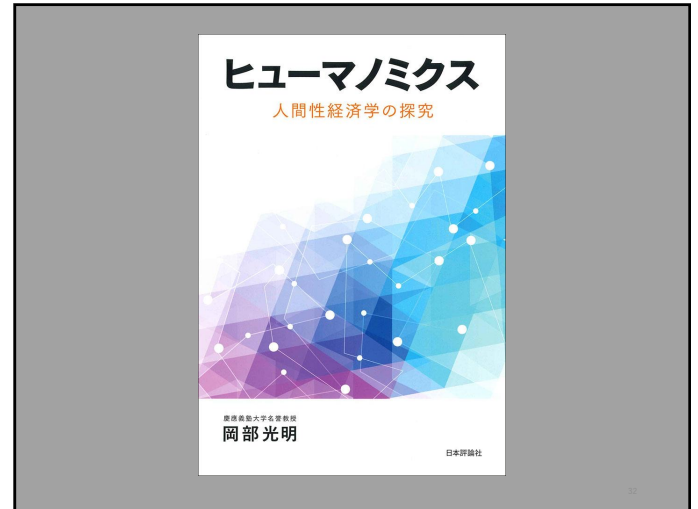
■主流派経済学の前提・姿勢は狭隘に過ぎる

→ こうした部門（**第三部門・非営利部門・コミュニティ**）を無視した経済学は社会科学として「欠陥学問」。

→ 上記のような人間像と社会の実態を前提にして社会を理解する必要。

→ “**Human economics**”、略して “**Humanomics**”（人間性経済学）がいま求められているのではないかと（岡部2022）。

31



32

[確認] NPOの成立条件、支える動機

■NPO成立の4条件 Anheier (2005)

- 1) 自己統治組織。
- 2) 非営利かつ**非利潤分配**。
- 3) 制度的に政府から分離された組織。
- 4) 活動への参加が**非強制的**。

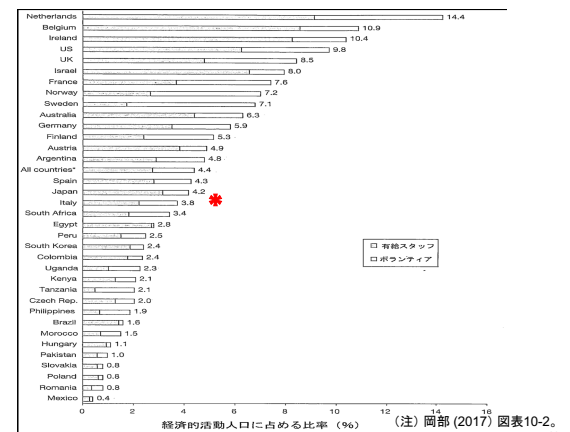
■NPOを支える動機:

人間の利己心というよりも、人間の基本的ニーズ（**自律性、自信、絆など幸福**に関連する要素）によってNPOの活動が支えられる面が大。

33

33

■日本のNPO部門は、比較的小規模にとどまる



34

3. 人間社会の的確な理解: 三部門モデル

■二部門モデルから 三部門モデルへの切り替え

・主流派経済学: 社会を**二部門**（市場と政府）モデルで理解。

↓

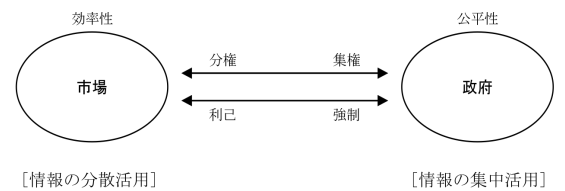
・的確な把握: **三部門**（市場・政府・**NPO***）モデル。人間的価値（自発性、幸福等）も重視。

* 非営利組織（NPO）、各種コミュニティなど。

35

■経済学における社会の理解: 二部門モデル

(1) 経済学における従来の視野

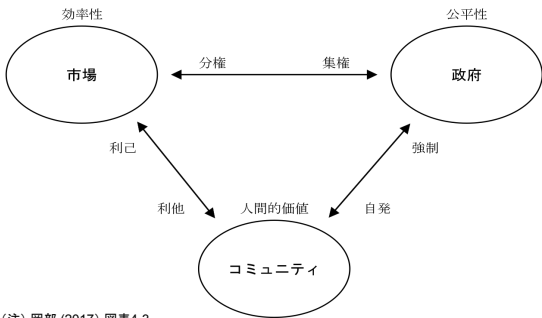


(注) 岡部 (2017) 図表4-3。

36

■社会のより良い理解: 三部門モデル

(2) 今後望まれる視野



(注) 岡部 (2017) 図表4-3。

37

37

■なぜ三部門モデルが妥当なのか？

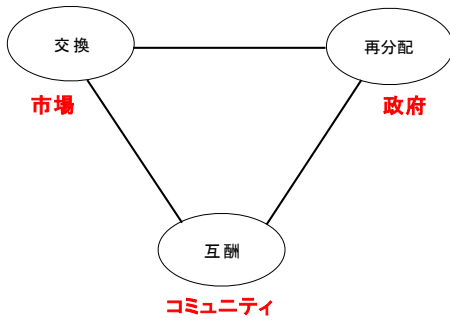
→ 解答1: 経済人類学による裏付け

人間社会は、時代を問わず、三つの行動原理によって支えられて機能してきた (ポランニー 1944):

- ・交換 (exchange) → 市場
- ・再分配 (redistribution) → 政府
- ・互酬 (reciprocity) → コミュニティ

38

図表9 ポランニーによる人類社会の理解: 三機能モデル



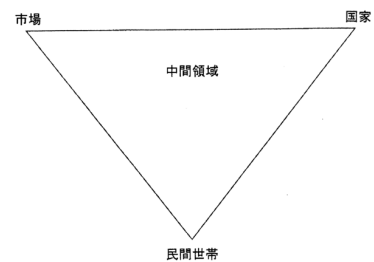
(注) Polanyi (1944: 3章)、ポランニー (1980: 4章) を踏まえて作成。
(出典) 岡部 (2022) 図表 8-3。

39

39

■これまでに見られた各種「三部門モデル」

図表6 福祉の三角形

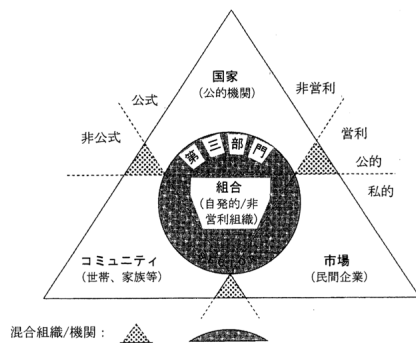


(出典) Evers and Laville (2004b) 15 ページ。原典は Evers (1990)。

40

40

図表8 福祉ミックス (ペストフの福祉三角形)



(出典) Evers and Laville (2004b) 17 ページ。原典は Pestoff (1992, 1998)。

41

■なぜ三部門モデルが妥当なのか？

→ 解答2: 経済政策の理論に合致

(1) 社会全体としてみると、多様な「準公共財・準公共サービス」のニーズがある。

- ・介護・福祉、地域包括ケアシステム。
- ・リサイクルなど環境保護。
- ・美術館やコンサートホール。
- ・漁業資源の管理。

→ それらへの対応に相応しいのは第三の主体。

42

財の種類と供給主体の適否

	私的財	準公共財	公共財
市場	◎	△	×*2
非営利組織/ 非営利部門	△	◎	×*3
政府/公共部門	×*1	△	◎

◎:最も適する。△:他の部門と競合する。×:不適當。
 (注) *1 政府の失敗があるため不適當。
 *2 市場の失敗があるため不適當。
 *3 自発部門の失敗(規模不足)があるため不適當。

(出典) 岡部 (2017) 図表10-3。

43

43

■なぜ三部門モデルが妥当なのか？

→ 解答2: 経済政策の理論に合致

より厳密に言えば、経済政策論の下記の二つの原則に合致:

- a) 複数目標を達成するには、複数(同数)政策手段が必要(ティンバーゲンの原理)。
- b) 目標達成には、そのために最適な政策手段を使うべし(マンデルの定理)。

44

■換言すれば、

- (1) **NPOの存在は**、強制ではなく人間の基本的ニーズ(自己実現など幸福の追求)によって支えられ、保証される。
- (2) 第三部門を理論上はっきり位置づけるならば**社会目標をより良く達成**できる。一より満足のかゆく結果が得られる。

45

45

4. 個人の幸せとより良い社会:実践哲学

■自己啓発 (self-improvement) の重要性:

- ・人格(パーソナリティ)の向上
- ・使命の自覚と達成
- ↓
- ・その個人の幸福
- ・社会への貢献

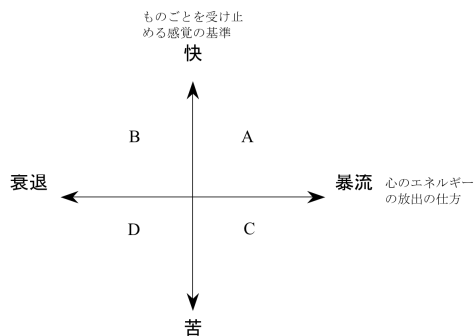
■高橋佳子氏(2018, 2019ほか)による「実践哲学」*

* 魂の学、トータルライフ(TL)人間学、神理の体系、などとも。

46

46

図表1 人間の思考および行動における4つのタイプ



A=快・暴流, B=快・衰退, C=苦・暴流, D=苦・衰退

(注) 高橋(2008:183ページ, 2009:1015ページ)に多少追加記載。
<https://bk.isindan.net>

47

47

■性格診断: 長年にわたって蓄積されたデータに基づき、誰でも

- ・無料で
- ・匿名で
- ・簡便に

利用できるシステムを開発。インターネット上で提供。36項目の質問に逐次回答を選択。

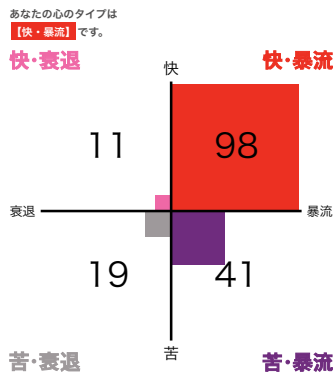
・<https://bk.isindan.net>

■4つの性格要因の定量的判定。そして、当人の 1)特徴的な反応経路、2)その特徴、3)自己研鑽の方向、が瞬時に提示される!

48

48

図表 13-3A 自己診断結果の事例(1)



・<https://bk.isindan.net>

49

49

図表 13-3B 自己診断結果の事例(2)

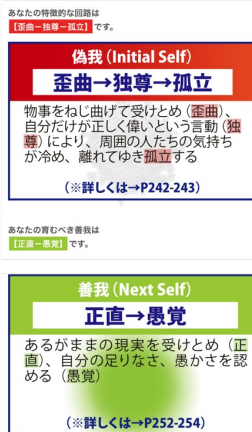
人の意見を聞かず「イケイケドンドン」と自分の考えで突き進む快・暴流タイプ。

しかし、その奥には——明るさ・エネルギー・ビジョン・超越・自由・希望・意欲・元気・創造・開拓・飛躍・産出といった光が輝いている。

『自分を知る力「暗示の帽子」の謎を解く』
P226 より

50

図表 13-3C 自己診断結果の事例(3)



51

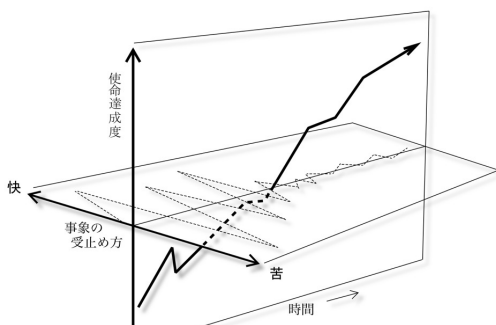
■実践哲学の効果: 個人の幸福 & より良い社会

- ・人間は誰でも定型パターン(快か・苦かの二分法)で物事を受け止める習慣を修得。
- ・しかし鍛錬すれば、そのことに気づくとともに中道ないし中庸の振る舞いが可能。
- ・自由ですがすがしい生活 [個人のwell-being]、各自の使命達成 [分業に基づくより良い社会]。

52

52

■実践哲学を修得し実践する効果(イメージ)



(注) 岡部 (2017) 図表13-9。

53

53

■この実践哲学の特徴

1. 先端性 (人間の潜在能力*解放を基礎)。*A. Sen のいう capabilities
2. 現代性 (個人の考え方や行動を基礎。科学性。さらにSBNRという現代の要請に合致)
3. 合理性 (原因と結果の法則を基礎)。
4. 実践性 (思想の実践手段も提供)。
5. 社会変革力 (多くの実証結果で証明、p328-329)。

54

54

5. 結論

1) 現在の主流派経済学は、人間に単純な前提(利己的・個人的存在)を置くことにより、理論と政策につき堅固な体系を構築している(経済学は「社会科学の女王」)。

2) しかし人間の本質としては、利己性のほか、つながり感覚、利他性、潜在的な能力といった重要かつ多様な要素がある。

これは経済学の始祖アダム・スミスの人間観であり、また現代諸科学の研究結果でもあるので、経済学は今後これらを取り込んだ学問にしてゆく必要がある。

55

55

3) 具体的には、人間社会を理解するうえでは、従来の二部門(市場・政府)モデルに代えて、現実をよりの確に描写する「**三部門(市場・政府・コミュニティ)モデル**」に即して理解することが望ましい。

4) 三部門モデルを基準にすれば、従来の社会的目標(効率性と公平性)だけでなく、準公共財・準公共サービスを充足させうるほか、人間の幸福(well-being)をより高いものにしうる(それは経済政策論に基づき説明可能)。

56

56

5) 人間一人一人がその潜在能力を引き出せば、個人の幸せ(ウェル・ビーイング)が高まるだけでなく、より良い社会を実現できるとする一つの自己啓発の道(実践哲学)があり、今後の展開が注目される。

以上

57

57

[主要関連文献]

岡部光明 (2017) 『人間性と経済学—社会科学の新しいパラダイムをめざして』、日本評論社。

岡部光明 (2022) 『ヒューマノミクス—人間性経済学の探究』、日本評論社。

Anheier, Helmut K. (2005) *Nonprofit Organizations: Theory, Management, Policy*, London: Routledge.

Christakis, Nicholas A., and James H. Fowler (2009) *Connected: The Surprising Power of Our Social Networks and How They Shape Our Lives*, Back Bay Books: Little, Brown and Company.

Polanyi, Karl (1944) *The Great Transformation*, Rinehart.

Smith, Adam (1759, 1790) *The Theory of Moral Sentiments*, 1st edition in 1759; 6th edition in 1790: Clarendon Press, 1976.

Pestoff, Victor A. (1998) *Beyond the Market and State: Social Enterprises and Civil Democracy in a Welfare Society*, Aldershot: Ashgate.

58

58